

① ボランティアに対する被災者のニーズは、どう移り変わっていますか。記事の中から抜き出しましょう。

民間ボラセン活動5カ月

「まだ手助けが必要」

福岡・大分豪雨から7カ月。復興の進む日田市だが、被災地にはなお課題がある。災害後に結成され、活動が5カ月を超えた民間団体「ひちくボランティアセンター」の取り組みをリポート、被災地に残る課題について考える。

福岡・大分豪雨
向き合う
ボランティアが
見た被災地
= 上 =

地 域 と 考 え る
支 社 局 リポ ー ト

ひちくボラセンのメンバーは日田出身・在住者9人は水路の泥出しなど農地間で、うち約半数は20代。9月から大鶴公民館を拠点に週末に活動。被災者から依頼を受け付け、支援者を募ってきた。昨年未だに延べ1615人のボランティアを受け入れ、108件の依頼を解決した。しかし、未解消のニーズは常に30件ほどあり、横ばい状態。当初は住

居周りが多かったが、最近もあれば、自宅や農地が復旧していない人もいる。被災者からは次の梅雨時季に対応できるか心配する声も聞かれました。また手助けが必要と

1月中旬、今年初めての活動があった。1度に満たない冷え込みの中、センタ

② 何がボランティアを動かすのが、ボランティア自身から語られています。その部分を抜き出しましょう。



活動するひちくボランティアセンターメンバーと市内外から集まったボランティア＝日田市大鶴地区

1のメンバーを含めた18人は声を掛け合いながらスコップや荷物を軽トラックに積み込み、農業用水路の復旧のため大鶴地区の上宮町へ向かった。豪雨直後から毎週末参加する「常連」の一人、由布市庄内町大龍の内田正寿さん(61)は「地域を笑顔にするという目的を見いだしてからは、自然に日田へ足が向かうようになった」と話した。

作業中もメンバーたちは笑みを絶やさず、彼らのパワーが復興の追い風になっている。

昨年7月の豪雨で、日田市内では住宅53棟、非住宅46棟が全壊、41棟が大規模半壊、31棟が半壊、517棟が床上浸水、260棟が床下浸水した。1月26日現在、罹災証明書発行の内訳。みなし仮設住宅への避難者は8世帯153人(同日現在)。市は1月31日、復旧計画を発表した。

(2018年2月6日付朝刊日田玖珠面)

③ この記事の主見出しを考え、上部の四角の中に入れてみましょう。